

森鷗外『雁』と『虞初新志』の「大鉄椎伝」

林 淑 丹

—

『雁』は鷗外の長編現代小説で、明治四十四年（一九一一年）九月一日発行の雑誌『昂』第九号から、大正二年（一九一三年）五月一日発行の第五号まで、「鷗外」の署名で連載された。その「壹」から「貳拾壹」までは雑誌に連載されたが、「貳拾貳」から「貳拾肆」までは雑誌に発表されず、大正四年（一九一五年）五月十五日に「壹」から「貳拾肆」までが併せて単行本として栩山書店から発行された。大正四年四月一日の鷗外の日記に『雁』の脱稿のことが見え、五月十一日の條に「雁初版成る」とある。

『雁』は岡田の友人である「僕」の回想という形で書かれた物語である。貧窮のうちに無邪気に育ったお玉は高利貸し末造に望まれてその妾となる。医科大学裏の小さな妾宅に囲われて女中と二人で暮らすうちに、散歩の途中に顔を合わせ

る医科大学生岡田に恋心を覚える。末造が千葉に行った留守に、彼女は岡田を妾宅に招き入れようとするが、岡田は「僕」を伴っており、お玉と二人きりになる機は失われた。そもそもこの時は、下宿の夕食に嫌いなさばのみそ煮が出たため「僕」が岡田を誘い出したのであり、その日は岡田がドイツへ留学するため下宿を引き払う前日であった。こうして二人は結ばれずに終わる。

主人公の岡田はよく中国の明清小説を読んでいる。古本屋で中国四大奇書の一つとされる『金瓶梅』を買おうとしたし、明末清初文言短編小説集の『虞初新志』を愛読している。

岡田は虞初新誌よちしんしが好きで、中にも大鐵椎傳は全文を暗誦することが出来る程であった。（中略）

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。あの傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闕の外に待たせて置いて、徐

かに脂粉の粧を凝すとても云うやうな、美しさを性命に
してゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたで
あらう。『鷗外全集』第八巻、一九七二年六月、岩波書
店、頁四九八)

岡田は愛読している『虞初新志』の中で、「大鉄椎伝」と「小
青伝」とに惹かれたという。

『虞初新志』は全二十巻、百五十編で清の張潮（一六五〇—
一七〇九）が編纂した伝奇小説集である。東京大学附属図書
館にある鷗外蔵書中の『虞初新志』は、張潮の編輯で荒井公
廉の訓読による河内屋徳兵衛大坂書林（嘉永四年）の版であ
る。『虞初新志』に収録された作品の題材は英雄豪傑の話や詩・
書・琴・画に優れた人物の話、奇怪な事柄、神仙、鬼怪談な
ど多岐にわたり、奇特なこと、不思議な話が収められている。
登場人物は盗賊から、文人、英雄豪傑、庶民、動物、神仙、亡
霊などさまざまである。その性格は一言で言えば、「奇」であ
ろう。百五十編の中で『雁』の岡田が惹かれた「大鉄椎伝」は
武勇伝で、「小青伝」は才子佳人の要素の強い物語と言えるが、
どちらも「奇」の性格を持ち、奇特な人柄、性質を持つ人物
を描いており、『虞初新志』の一編としては典型的なものであ
る。本論では「大鉄椎伝」に注目して、岡田と大鉄椎との人
物造型はどう重なるのか、『虞初新志』の「大鉄椎伝」を持ち

込むことで『雁』がどのような作品となったかについて論じ
たい。

二

「大鉄椎伝」と「小青伝」とは同じく巻一に収められてい
る。鷗外蔵書の『虞初新志』巻一には六編の作品があるが、そ
の順序は以下の通りである。魏禧の「大鉄椎伝」、林嗣環の「秋
聲詩自序」、周亮公の「盛此公伝」、王猷定の「湯程琶伝」、作
者不明の「小青伝」及び宋曹の「義猴伝」である。「大鉄椎伝」
は鷗外蔵書の『虞初新志』の中で巻一第一編にあるが、他の
版本、例えば咸豐元年重刊、小琅嬛山館蔵板の『虞初新志』の
中では巻一第一編は「大鉄椎伝」ではなく、鷗外の『虞初新
志』にない「姜貞毅先生伝」である。

「大鉄椎伝」の作者魏禧は字が冰叔であり、寧都の人であ
る。『清史稿』卷四八四、「文苑伝」は彼について次のように
説明している。

魏禧は明が滅びた時、悲しみ嘆き、断食して翠微峯に隠居
し、その後亡くなった。小さい頃古典に興味を持ち、歴史を
論じてよくその才能を見せていた。十一歳の時県の学生にな
り、兄の際瑞、弟の禮と一緒に易堂で勉強した。兄弟皆自給
自足の生活をしなから、学問に励み、自立の生活をした。歴
史書を読むことが好きで特に『左氏伝』と蘇洵の文章が好き

だという。魏禧の文章は力強い。彼は忠義の事件や親孝行の美談に感動し、それにより創作意欲も増してくる。五十七歳の時亡くなり、妻の謝氏は断食して殉じた。著に『文集』二十二卷、『日録』三卷、『左伝経世』十卷がある。

このように魏禧は小さい頃から歴史に関する優れた論を見せたり、『左氏伝』、蘇洵の歴史書を読むことが好きで、明代が減じた時悲しむ余り、断食して隠居していたことから、忠義であることに大変熱心だったことが分かる。「大鉄椎伝」は明代当時の実際にあつた話だと言われる。魏禧は忠義の豪傑大鉄椎に惹かれて「大鉄椎伝」を書いたのであろう。

「大鉄椎伝」は宋將軍の食客である陳子燦の体験談という形を取っている。宋將軍は武術が高く、当時の多くの豪傑たちがその名を慕って彼の食客になつた。大鉄椎もその中の一人だが、どこの人か分からず出身と名前を聞いても答えない。言葉少なでいつも右の脇に四、五十キロの大鉄椎を抱えているので大鉄椎と呼ばれる。そこで語られるのは、將軍が思うほどの才能がないことを知ってから、ある日一人で大勢の盜賊と勇ましく戦つて直ちにこれを殺し、驚く將軍を尻目に立ち去ってしまうという英雄の事績である。編者張山來（張潮）曰く、全文の一番優れた所は大鉄椎が三回も言った「吾去矣」（われ去らん）の一句である。きっぱりしていてまるで名画家が描いた竜の鱗と爪のようにはっきり見えるほどの素晴らし

さだという。確かに「大鉄椎伝」はただの武勇伝ではなく、全文の言葉が大変簡潔で力強く、ストーリーの展開も速く、名文だと言える。

『虞初新志』の中に武勇伝の語型は四つある。「大鉄椎伝」の他、「五人伝」（卷六）、「宋連壁伝」（卷三）と「劍侠传」（卷九）とである。これら四つを読み比べると、「大鉄椎伝」は他の三つの武勇伝に比べて神秘的な要素が濃いことが窺える。冒頭から大鉄椎はどこ出身の人か分からず名前も分からない人物である、と書いてある。しかも言葉が少なく、夜には誰にも言わずに急に出かけたかと思うと、いつのまにか誰も気付かないうちに戻ってきたりする。宋將軍が驚くほどの達者な武芸も、最後の場面での盜賊との戦いを將軍自身が行くまで明らかにされない。そして戦いが終わると、どこへともなく消えてしまう。このように、主人公の行動における奇特性、また神秘さが鮮烈な作品なのである。

三

『雁』の中に「岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鉄椎傳は全文を暗誦することが出来る程であつた」とある。それほどまでに「大鉄椎伝」に興味を持っていた彼の性格が、大鉄椎という人物によって影響されたかどうか注目し、『雁』と「大鉄椎伝」との関わりについて二つの角度から考察したい。

一つは岡田と大鉄椎との性格の類似点についてである。もう一つは退治の場面とストーリーの展開の仕方である。

まず、二人の性格の類似点について見てみたい。

二人とも寡言で、果断だと思われる。大鉄椎は「與人罕言語、語類楚聲・扣其郷及姓字、皆不答。」（鷗外蔵書『虞初新志』、頁一、以下同）（言葉少なで楚の国の訛りに似ている。出身と名前とを聞いても答えない。）という無口の人である。夜中に出掛けても誰にも言わない。彼についての描写は殆ど実際の行動であって彼自身の言っている言葉は最後の「われ去らん」くらいである。また大鉄椎は宋將軍のもとを離れる前に何も予告しなかった。彼はもともと宋將軍のもとで武術を習っていたが、月日が経つとその將軍に「吾始聞汝名、以為豪、然皆不足用、吾去矣。」（頁一）（おれは初めてお前の名を聞いた時、とても勇ましい豪傑だと思ったが、それほどでもないと思う。われ去らん。）と言った。宋將軍が大した英雄ではないと分かると、すぐに彼の下を去ってしまったのである。大鉄椎は身分の差にとらわれない人物でもある。果断で思い切りがよく、実行力もある英雄人物とも思われる。

一方、岡田はとくに洋行することを決めていたのに、何も言わずに行く前の日にいきなり「僕」にそのことを話して「僕」を驚かせる。「僕」は「驚いたね」、「君は果断だよ」（頁五九六）と言う。岡田は洋行すること、自分の夢、目標の

ために他のこと（学校をもうすぐ卒業することやお玉のことなど）を思い切って捨てたことになる。もちろん、洋行することが当時の若者にとって困難かつ重大な行為だったことは言うまでもない。そのような重大なことを誰に相談することもなく、まして誰に予告することもなく自分一人で決めて実行する岡田を「僕」は「果断」だと思ったのである。このように岡田も寡言であるが、深く考え、最終的に思い切った判断をする人だと言えるであろう。

また、二人とも文武両道の人である。大鉄椎が盗賊退治の場面で見せる武芸の素晴らしさは言うまでもない。当時武術に高名な宋將軍が驚き震えながら、何も言えなかったほどである。しかし、大鉄椎は武芸の拔群な豪傑であるだけではない。「子燦又嘗見其寫市物帖子、甚工楷書也。」（頁二）（子燦はかつて大鉄椎の書いた帳簿などを見たことがあるが、すべて優れた楷書であった。）のように書の道にも秀でた。

一方、岡田はどうであろう。「僕」の記憶によると、当時「岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少なからうと思つてゐた」。彼は勉強の方はやるだけのことをちゃんとやっ遊ぶ時間はちゃんと遊ぶ、というタイプの人である。しかも美男子で「色の蒼い、ひよろひよろした美男ではな」く、「體格がかつしりしてゐた」（頁四九二）。運動にも秀で、競漕を始めて間もなく仲間には推されて選手になる程の進歩を示した。こ

の急激な進歩の原動力となったのは、彼の志したことは必ずやり遂げるといふ彼の性格に加えて大鉄椎への憧れもあった。

岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鉄椎傳は全文を暗誦することが出来る程であつた。それで餘程前から武藝がして見たいと云ふ願望を持つてゐたが、つひ機會が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間には推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此の一面の意志が発展したのであつた。(頁四九八)

岡田には文学趣味もあつた。よく古本屋を覗き、『花月新誌』や『桂林一枝』という漢詩文の文学雑誌を読み、また明清の才子の文章を読んでもいる。従つて岡田は大鉄椎と同じく文武両道の間人だと言へるであらう。文武両方をたしなむ生き方は彼の読書趣味にも反映している。即ち、愛読書の『虞初新志』でも取り分け、武勇伝の「大鉄椎伝」とセンチメンタルな「小青伝」とに惹かれてゐるのである。つまり、武の「大鉄椎伝」と文の「小青伝」とが好きなのである。

このように大鉄椎も岡田も寡言で深く考えながらも果敢な文武両道の間人として描かれてゐる、と解される。

四

次に、二つの物語における退治場面の描き方とストーリー全体の展開の仕方に着眼したい。

「大鉄椎伝」では大鉄椎は一人で素早く百何人の盜賊と戦い、落ち着いて慌てず椎を振つてあつという間に三十人を殺した。その戦いぶりには宋將軍も驚いたが、大鉄椎の方は勇ましく戦つてから砂ほりを立てて東へ馳せ、去つてしまつた。その後二度と戻つてはこなかつた。

この大鉄椎の盜賊退治に対応するのが、『雁』における岡田の蛇退治の場面である。いつもの散歩の道で岡田は、お玉の鳥籠が蛇に襲われたのを見た。彼は、これはどうも女たちには対処できない事だと思い、躊躇せず蛇を退治した。この場面では岡田の勇ましきや蛇の動きなどが生き生きと描かれ、また周囲で見ている女達の慌てている姿と、岡田の冷静な姿とが対比されている。お玉は好きな人の前なのでどうしようか、何を言おうか分からず慌ててゐる。その反対に、岡田はまず状況を観察して「何か刃物はありませんか」(頁五六八)と言ひ、女中の持つてくる包丁を「待ち兼ねたやうに」受け取つた。そして体操が得意の彼は「肘掛け窓へ片足を掛け」て、「左の手はもう庇の腕木を握つてゐる」(頁五六九)。それから上手に素早く蛇を真つ二つに斬つた。彼は最初から最後まで慌

てず落ち着いていて冷静であった。最後に蛇の死体を片付け
てから、すぐ「さやうなら」と言い、「跡を見ずに坂を降りた」
(頁五七三)。まるで大したことは何もやっていない、とい
うような態度である。

岡田は大鉄椎とは戦う対象や動機とが異なるけれども、そ
の慌てず落ち着いた様子と勇ましきは類似している。大鉄椎
は勇ましく戦ってから「われ去らん」と言い、どこへ行った
か分からなくなってしまった。岡田の場合は蛇を退治してか
ら行方が分からなくなったわけではないが、用事が終わった
ら、すぐ「さやうなら」と言ってさっさと帰ってしまう。二
人とも、戦ってからすぐ消えてしまったのである。

次にストーリー全体の展開の仕方について見てみたい。

まず、物語の叙述の方法である。大鉄椎の話は陳子燦が河
南へ兄に会いにきた時、宋將軍の家で大鉄椎に会った時の見
聞をもとにしている。つまり、陳子燦という人物によって主
人公の大鉄椎が語られるわけである。

一方、鷗外の『雁』の場合はどうであろう。作品の冒頭の
部分である。

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だ
と云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚え
てゐるかと云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の真向かひ

にあつた、上条と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ
隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上条
が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人
であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふこと
を、僕は覚えてゐるからである。(頁四九一)

『雁』の物語は「僕」の記憶によって語られたものである。
「僕」はふと学生時代の下宿屋の隣に住んでいた男を思い出し
た。この岡田という男がどんな人間なのか、彼の青春の一ペー
ジから紹介したのである。物語の叙述の方法から見ると、語
り手の「僕」によって主人公の岡田が語られたわけである。

つまり、『雁』では「大鉄椎伝」と同じく第三者によって主
人公が語られている。

次に、人物像について考える。

「大鉄椎伝」について、魏禧は明朝が滅びた時大麥悲しみ
嘆いたということから、この作品のテーマは亡国の哀傷を表
すものや、作者の明代の皇帝と臣下への不満と復讐の意識を
表すもの、などという論がある。これとは別に、大鉄椎の人
物描写に注目した論もある。劉宗徳氏は、大鉄椎の人物像の
描き方について遠い所から次第に近づいてくる、という手法
を指摘している。

確かに大鉄椎については最初の神秘的なイメージに始まり、

次第に人物像が明らかになるという描かれ方が見られる。冒頭から、大鉄椎はどこの人か分からず名前を聞いても答えない、と書かれている。物語は陳子燦の実験の経験から分かったものだ、というふうで紹介されている。陳子燦は宋將軍の家で大鉄椎に会ったことがある。そうするとついでに宋將軍を紹介しなければならぬ。宋將軍は剣の武術に優れていてその周りの七省の英雄達が皆宋將軍の下に武術を習いにくるほどであった。当時宋將軍の武芸が高くて有名なことが分かる。その弟子達も弓が上手であつてさすがに「勇將の下に弱卒なし」という言葉の通りである。このように宋將軍の強さを描いたのは、大鉄椎の人物像を更にはっきりさせようとするためなのではないか。なぜかという大鉄椎もその大勢の弟子達の一人だからである。魏禧は周辺を描くことから大鉄椎の人物像に迫っているのである。

一方、大鉄椎の外貌についてはあまり描かれていない。「時座上有健啖客、貌甚癯。」(頁一)(その時食客の中で大食いであつて容貌の醜い人がいた。)とあるように、普通と違うイメージが与えられてはいる。ただごく簡単な服を身につけ、青い布で頭を包み、白い布で足をくるんでいる。いつも大鉄椎を抱えていてまるで何かを警備しているかのようにいつも身から離さない。しかし、彼の行動では夜中の活動や身分を隠すこと、腰に多くの金銭をぶら下げていることなどで奇妙に思

わせる。文章はここまでは側面から、つまり周辺のことから大鉄椎を書いている。最後に、宋將軍が思ったほどの能力がないので大鉄椎は思い切つてそのもとを立ち去り、盜賊との戦いで宋將軍に手伝つてもらおうとせず、一人で勇ましく勢いよく盜賊達を退治した。ここでやっと大鉄椎の正体が分かり、人物像がはっきりする。またこの時蔭で戦いを見ている宋將軍はただ息を詰めて驚き震えているが、この皮肉な描写は一層大鉄椎の判断の賢明さを証明する。

そして、ストーリー全体の展開は盜賊退治の場面でクライマックスに達した後、大鉄椎の行方が分からなくなつてしまひ、一転意外な結末を見せる。最後に余韻が残り、大鉄椎が印象深く浮かび出るわけである。

一方、『雁』の場合はどうであろう。

岡田の人物像は正面からではなく、「大鉄椎伝」のように側面から描かれることが多い。この作品は「僕」の記憶によつて書かれたものである。冒頭と結末とから分かるように、物語の成立は、「僕」の学生時代の出来事で、「僕」の実験の経験と、岡田が去つてからお玉から聞いたこととの組み合わせである。

作品の構造から見ると、『雁』は全部で二十四章からなる。しかし、主人公岡田についての叙述は八章で全体の三分の一しか占めていない。それは第一、二、三、十八、十九、二十

二、二十三、二十四章である。第一章では語り手の「僕」が岡田を珍しい人だと紹介する。同じ下宿屋に住んでいて幅を利かしている普通の人と違い、時間厳守で「信頼すべき男だ」(頁四九二)と言われている。それに文学趣味がある。第二章、第三章では「窓の女」お玉が登場して岡田がただ会釈するくらいである。岡田の紹介はここに止まり、第四章から第十七章まではお玉と末造の話である。そして、第十八、十九章では岡田についての描写のクライマックスだと言える蛇退治のシーンがある。ここで岡田は競漕や体操などで鍛えた体を生かして簡単に蛇を退治する。退治してから軽く「さやうなら」と言い、立ち去ってしまう。蛇退治してからの第二十、二十一章では岡田のことに触れず、お玉の心理描写がなされる。そしてちょうどお玉が岡田に恋心を打ち明けようとしたところ、第二十二章から最後の二十四章までは予想しないことが書かれている。岡田は洋行を決意して去ってしまう。いつも一人で散歩している岡田はその日に限って、「僕」に誘われて一緒に散歩していた。お玉は岡田に声を掛けることができず、翌日岡田は洋行してしまい、お玉と岡田とは永遠に会えなくなったのである。

このように、「大鉄椎伝」では盗賊退治のシーンによって物語がクライマックスに達する。一方、岡田とお玉との物語は蛇退治のシーンによってクライマックスに達したと言える。ま

たどちらの物語でも退治が終わった後、ストーリーは一転して予想せずに主人公が消えてしまう。その余韻が読者に強い印象を残すのである。

五

「大鉄椎伝」のテキストは、『虞初新志』の「凡例十則」に書かれているように二種類が見られる⁽³⁾。一つは魏禧の作で、もう一つは新安王不菴の作である。王不菴の「大鉄椎」は『啗史』に収められていて題名に「伝」という文字が付いていない。『啗史』は王焯(王不菴)の撰で明代伝奇小説集である。現在では『昭代叢書統集』にしか見られない⁽⁴⁾。一卷で「趙爾宏」、「大鉄椎」、「談仲和」、「黄孟通」、「蔣龍岡」、「内江」六編及び附録『塘報日計節略』を収めている。王不菴の「大鉄椎」では物語が、魏禧のものと同じく陳子燦の見聞から書かれたものであるが、話の筋は魏禧の「大鉄椎伝」より簡略である。人物像に関し、簡単な服で体を包み、出身や名前を聞いても答えないことが魏禧の「大鉄椎伝」と同じであるが、大食いで食べることを以外は終日寝込んでいて軒が雷のようになって、周りの人たちが困っている様子は魏禧の作に見られない。また大鉄椎の書が上手なことに触れていないことから、彼が文武両道とは断言できない。

ストーリー全体の展開の仕方について、大鉄椎は宋將軍が

思ったほどの武芸がないと分かったらすぐその下を離れ、大勢の盗賊と勇ましく戦ってからすぐ姿を消してしまふ、と二つの作品で殆ど同じ流れが描かれている。しかし、魏禧の「大鉄椎伝」において大鉄椎が三回も言った「われ去らん」という言葉の力強さが王不菴の「大鉄椎」に見られない。

岡田が全文暗誦できるのは『虞初新志』にある魏禧の「大鉄椎伝」である。全文暗誦できることから、大麥惹かれています。このように、『虞初新志』の「大鉄椎伝」を持ち込むことで、語り手である「僕」が表面的に描く岡田の人物像だけでなく、岡田の大鉄椎的な性格もまた見えてくる。こうして岡田の性格の多重性が見えてくるのではないか。また「近代日本の代表的青年」としての岡田と、中国伝奇小説の英雄の流れを汲む主人公としての岡田が同時に表現されている。その意味で『雁』は明清伝奇小説と近代小説とを融合した作品とは言えるであろう。これから岡田だけではなく、ヒロインのお玉と岡田の好きな『虞初新志』の「小青伝」との関わりも考察の範疇に入れたい。

(注)

(1) 『清史稿』第四十四冊、卷四百八十四、文苑一（趙爾巽等撰、

中華書局、一九七七年八月）

(2) 劉宗徳「自遠漸近由隱而顯——談《大鉄椎伝》の人物描寫」

『語言文學』四十二号、一九八二年六月） 参照。

(3) 鷗外文庫『虞初新志』による。

(4) 『中国文言小説総目提要』（丁稼爾撰、齊魯書社出版、一九九六年十二月） 参照。